

# アウトプット・精読・解釈：通信教育課程で いかにして文学研究を教えるのか

田 中 和 也

## はじめに

昨今は文系学問、とりわけ文学研究が苦境に立たされているとしばしば評されている。そのような中で、いかにして文学を教えて、学生たちの生きる力を伸ばす助力ができるのか。そのささやかな試みの一例を、成否はともかくとして示すことが、本稿の目的である。上記のような文学の「苦境」の背景には、文学は「実学」ではないとされることや、昨今の読書離れが影を落としていると考えられる。このような世相において、いかにして文学の「有用性」を伝えるのか。僭越ながら、このことで悩まない文学研究者はいないだろう（そもそもその種の議論と言われる「有用性」とは何か、その議論の土台に文学研究者が乗っていくことが必要なのか、という問題もあるとは考えられるが）。

文学教育という点において、佛教大学では通学課程のみではなくて、通信教育課程も併設されていることから、一教員として得難い経験をすることができた。一言で言えば、通信教育課程は受講生の学歴や年齢層やニーズがバラバラである。また英語力の点でも様々で、英語圏の大学に留学したり卒業したりした人がいる一方で、基礎からの学習を希望する人もいる。この状況は、通学課程の学生の大半が、学力や年齢で似通った「輪切り」の集団となっていることとは対照的である。そのような通信教育課程で私が直面したり試みたりしたことが、ひょっとしたら広く文学研究や教育に携わる方々の「他山の石」になれるかもしれない。何より、佛教大学通信教育課程で教壇に立っている先生方に、何かしら力添え申し上げられるかもしれない。このささやかな野心と、自分自

身の振り返りのために、筆をとる次第である。

本稿では、通信教育課程の新入生を対象とした「基礎ゼミナール」での実践例を取り上げてみたい。この授業は基本的に新入生を対象としたものであり、各学部各学科が自らの学問の専門性を踏まえつつ、4年間の学びの方法や内容の青写真を示すことをねらいとする。私が所属する英米学科では、二日間にわたり、合計9コマを担当することになっている。このような限られた時間であるだけに、授業内容として出来る選択肢は、2つになると考えられる。一つは、学科の専門分野（英米文学、英語学、英語教育学）でできることを総花的に教えることである。もう一つの選択肢は、それらの分野から一つを深化させて扱うということである。私の場合は、各専門分野を横断できるだけの力量や見識はとてども持っていないことから、必然的に後者を選んだ。具体的に言えば、Joseph Conrad, *Heart of Darkness* を題材としたのである。以下では、この作品を用いた、授業実践を報告したい。

## 1. インプットとアウトプット： 通信教育課程の特色と、古典作品を用いる理由

まずは、「基礎ゼミナール」の授業の主眼やねらいに関して、整理したい。文学作品で「基礎ゼミナール」を担当すると決めて以来、特に心を砕いたことがある。それは、学生がインプット（＝資料の読解や分析・解釈）とアウトプット（＝レポート、つまり英語で言う paper を書くこと）を自らでできるようになるには、いかなる教育手法と内容が必要かという点である。インプットもアウトプットも、大学生に必須であることは自明である。しかし、通信教育課程という形態では、学生たちが大学に頻繁にやってくることができず、教員に直接助言を得るという機会は、残念ながら少ない。このため、学生たちは自主的に課題図書を読み、それに関するレポートを独力で作成・提出し、その添削を読むことを通じて、自己研鑽していくことが求められる。だが、そもそも教員との対面授業が少ない以上、どのようにテキストの言葉遣いや肌理に注目して、なおかつそれらにどのようにコミットしていくのかを自分で気づくこ

とは、極めて難しい。

ましてや、それらテキスト解釈に関わる諸要素を学生自ら考慮に入れることができて、自分の意見を自らで論理的に構築することは、さらに困難だと思われる。この理由には、後述する paragraph に関して独力で学ぶことが難しいという、レポートのもつ論理構造によるところもある。だがそれと同時に大きな要因なのは、テキストの読み方や着眼点に関わることである。これが通学課程であれば教員は、文献の読み方にしても、どこに着眼するのかを、生で示せる。さらにはその際に教員は、学生とのインタラクションで授業内容を調整することができる。また、教室にいる受講生仲間の視点が、他学生や教員に作品解釈のヒントを与え合っていくことも、珍しくない。その結果として、授業によって学生は、どのように論を組むのかという手掛かりを得ていくことになる。そのように教員が「お手本」を示すことが、通信教育課程では困難なのである。ましてや、教室で受講生仲間の意見に刺激を受けるという機会は、通信教育課程ではスクーリングでしかありえない。このような事情を鑑みて「基礎ゼミナール」では、1年生という早い段階でとにかくレポート執筆の基礎を体験して、なおかつ身に着けてもらうことを、第一とした。

このような通信教育課程の特性を鑑みて、インプットの面に関しては、*Heart of Darkness* を例にとって、作品テキストの精読を学生に講義形式で例示してみた。その際には、作品の構造にいかに注目して、なおかつ作品執筆時の社会的言説をどのようにして考慮に入れるのか、ということを手本として示すことを心がけた。そのような実践をするにあたり強調したいことは、文学史のキャンノンに入っている古典作品を使うことの利便性である。単純化して言えば、古典作品は内容や技法の面でも深みが保証されているので、精読するにしても先行研究をあたるにしても、実に適している。*Heart of Darkness* では、語り手の Marlow が匿名の聴衆たちに、植民地主義の時代にあったアフリカでの体験や、そこで出会った Kurtz という人物に関して、思いつくままに回想して話し続ける。いわば読者は Marlow の言葉遣いの肌理を味わいつつ、入れ子構造の語りとなっていることに注意しなければならない。それと同時に、コロニアリズムのような当時の社会的ディスコースに留意しながら読む必要が

ある。このようにテキストとコンテキストの双方の面で、キャンノンに入っている作品は研究が精緻となっていて、それら先行研究の読み方も教員は学生に手本で示せる。

実際に、*Heart of Darkness* には、語りの構造などのテキストの面でも、歴史的なコンテキストに関しても、先行研究が豊富に存在する。例えば、語りの構造の研究は、1958年の Albert J. Guerard や1979年の Ian Watt など、今なお Norton Critical Edition に論考がおさめられている大御所をはじめとして、枚挙にいとまがない。また、作品コンテキストに関しても、*Heart of Darkness* が Edward Said の *Orientalism* (1978年) や *Culture and Imperialism* (1993年) で言及されたこともあり、植民地主義表象などに関する研究も盛んである。いわば、多様な先行研究に学生に触れさせることで、作品に様々な切り口があるということや、それらの読み方も、示せるのである。

ましてや、それら多様な先行研究は、古典作品ならば手軽に手に入れることができる。例えば *Heart of Darkness* であれば前述の Norton Critical Edition のように、代表的な批評や作品のコンテキストに関わる資料・史料（作者の手紙などをふくむ）が内包された書籍も存在する。さらには、Conrad は Penguin Studies や Literature in Context シリーズのような基本文献、Critical Assessments シリーズのようなアンソロジーにも恵まれている。作品そのものも、Penguin Classics や Oxford World's Classics、Broadview Edition のように、読みごたえのあるイントロダクションや注釈がついたペーパーバックが比較的容易に手に入る。このため、キャンノンの枠に含まれている作品を教材とすれば、学生に総花的に批評の方法論、いわば多様な精読を示すことも容易である。ゆえに、精読は単に辞書を引きつつ作品を読むことではない、ということを、学生に明示しやすい。古典といえ、学生からはとっつきにくいというイメージを持たれるかもしれない。しかし、古典であるからこそ多様な解釈を授業で学生も考えやすい。そのため、学生にとっては自分の関心や主体を棚上げにせず、作品と向き合うことができるのである。

さらに見逃してはならないのは、キャンノンの作品には、多くの場合は日本語訳が存在するという点である。上記のように、英語力やそれに関するニーズ

が多様であるという状況下では、翻訳はとりわけ予習時に大きな力を発揮する。そのみではなくて、授業を終えてレポートを書く段階でも、翻訳は有用である。学生たちは、レポートにおいて原文と向き合って、引用や分析をする。その際には学生たちは、翻訳はあくまで翻訳者が示した一つの解釈であるということに気づかざるを得ない。このことは、最終的には原文のテクスチャーに触れることが必要だということを、彼らに実感してもらうことにも直結する。このような日本語での文献や翻訳は、大学から遠方に住んでいる通信教育課程の学生にとっても、地元で入手しやすいものである。このような地理的要因からも、キャンノンの優位はある。

日本語文献という点で言えば、キャンノンの作品であれば日本語でも優れた文献が豊富にあるということも、大きな強みである。和文の文献は、学生たちにとってはとっつきやすい上に、英語文献よりも容易に手に入れやすい。*Heart of Darkness* に関して言えば、個々の論文にしても、それが収録されている『英文学研究』のような論集は、多くの図書館に所蔵されているし、CiNiiでオンラインアクセスをすることも容易である。さらに重要なのは、このような論文よりもさらにアクセスしやすい、書籍という形での研究文献も豊かに存在することである。コンラッドや『闇の奥』に関して言えば、吉田徹夫氏の『ジョウゼフ・コンラッドの世界』という古典的名著がある。また、中井亜佐子氏の『他者の自伝』は、ポストコロニアル批評に立脚した切れ味鋭い本である。あるいは、山本薫氏は英文著書 *Rethinking Joseph Conrad's Concepts of Community: Strange Fraternity* が海外でも評価が高いが、和文でも『裏切り者の発見から解放へ』や『「自己」の向こうへ』のような著書を著している。あるいは、J. H. Stape が編集した *The Cambridge Companion to Joseph Conrad* は *Conrad* の代表的中長編を主に論じているが、これは2012年に『コンラッド文学案内』として翻訳版が出版されている。これらの文献は、もちろん優れた内容をもっている。それに加えて、それらで引用されている文献をさらに芋づる式で辿るという手法を教えれば、学生たちは国内外の文献の存在やその調べ方を身に着けていける。

また、このように専門分野のインプットに注力するのみではなく、アウト

プット、すなわち academic writing にも重きを置いた。上述したように通信教育課程では、レポート執筆やその添削はどうしても孤独であり、手続きを学ぶにも手探りとなりやすい。ましてや、基礎学力に不備がある場合はその心痛は大きくなるだろう。そのような学習上の「壁」を乗り越えてもらうためのスキルを身につけることも、私の「基礎ゼミナール」では目指してみた。また教員側としても、いったん academic writing の基礎を教えて、学生がそれに基づいて執筆を心がけるようになると、レポート採点自体が容易になりうる。このように、新入生向け授業で academic writing に注力することで、学生にしても教員にしても、時間の面でも「払い戻し」につながる可能性は小さくない。

## 2. アウトプットに関して：「段落」よりも“paragraph”

この節では、アウトプットの重要性や技法を、どのようにして学生に伝授するのかということ扱う。英米学科という事情もあり、基本的には、英文での paper の書き方を応用していくということを心がける。前節では、インプットの有りようを考察した後にアウトプットのあり方を考察した。しかし、実際の授業ではアウトプットから先に扱うようにしていた。これには二つ理由がある。一つは実際の事情で、時間割のためである。インプットの実践は、扱う対象作品からの引用箇所やその数を調整することで、時間の増減は比較的たやすい。だが、アウトプットに関しては、パラグラフや文体に関する説明など不可欠のものがあ、時間を削減することは容易ではないのである。そのため、時間の融通がきかないアウトプットから扱うようにした。第二の理由は、学生にレポート (paper) という到達点がいかなるものかを示し、それを想定しつつ授業を受けてもらえるようにするためである。いくら授業でインプット、つまり作品読解の例を見せても、それを元にどのように論を組むのかを知らなければ、効果的に受講することができない。このため、到達点を体感させることで、学生たちに能動的な学びを促すこともできるのである。

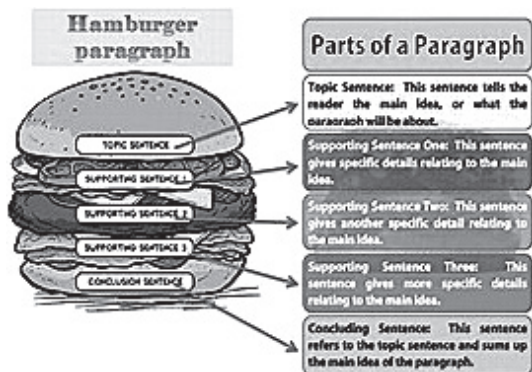
アウトプットの技法を伝えるには、三つの要素が必要だと考えられる。一つ目は、学生に paragraph の構造を理解させることであり、二つ目は章立ての

意識を身に付けてもらうことである。これら二つの要素で論の構造の外観を伝えた後に、三つ目の要素として、文体や書式などの細部にも注意することを促すことも重要である。このように、論の基本構造や骨格を第一に重視しつつも、細部にも留意しないといけないというところに、paper 執筆指導の難しさがある。

まずは、paragraph の教授に関して、考察していきたい。学生に paper を書かせるにあたっては、その中の最小単位である paragraph の重要性を伝えることが第一である。これは三浦順治氏が強調しているように、paragraph は日本語の「段落」とは似て非なるものであるがために、日英語の論理構成の違いを示すことができるからである。日本語の段落は「息継ぎのための物理的な単位」であるのに対して、英語の paragraph は「読み手を強く意識」した厳格な構成をもっている（三浦 97-98）。さらには、これはよく知られたことだが、日本語では文章を最後まで読まないで結論が出ないということが多い。それと比すれば、英語では冒頭の topic sentence を書くことで、最初から結論やテーマを明確にする。いわば、日本語的発想から英語的発想へと思考回路を変えないことには、paragraph を意識した paper は書けないのである。さらには、この paragraph を拡大コピーするかのごとく、節や章、さらには paper や論文全体も、最初と最後に主張や結論を語るという構造を持っている。しかも、これが章や paper 全体というレベルになれば、それらの冒頭は、章ないし paper 全体の thesis statement を提示するという、極めて重要なものとなる。このようなマクロな構造を学生に伝えるためにも、まずは paragraph というミクロな要素を扱う必要がある。

そしてどのように paragraph の構造を学生に伝えるのかという点では、やはり便利なのは、人口に膾炙している“Hamburger Paragraph”の考え方である（以下の図を参照。“Hamburger Paragraph”でインターネット検索をすれば、有用な画像や動画が多数見つかるので、一度ご確認いただきたい）。





この比喻によって、ハンバーガーの上のパンを topic sentence、下のパンを concluding sentence に見立てて、一つの paragraph では同一の topic のみを扱うことが示される。それら二つの sentence（上下のパン）に挟まれる形で、body つまり引用や具体例（肉やその他の具材）が存在している。このようにハンバーガーの比喻には、paragraph の骨子を図像的に示せるメリットがある。

ここで留意すべきは、concluding sentence は、単に topic の反復におさまらずに、次の paragraph と内容面で連結できるものにあることである。このような paragraph 間の連関性を欠いてしまえば、下手をすれば、paper 執筆者は自分の気になる点を淡々と書くのみになってしまう。それでは、箇条書きのごとく、関係のないポイントが並置されて終わってしまいがちである。私の拙い授業経験では、学生のレポートにおいては、話題をバラバラとつらねて終わりとなっているときは少なくない。それら「箇条書き」のケースでは、concluding sentence と、その次の paragraph の topic sentence との間において、論理的・内容的なつながりに不備があることが多々あった。

しかし、このハンバーガーの概念がさらに有用なのは、ハンバーガーの「中身」にあたる部分の役割を可視的かつ手触りをもって示せることにある。中身とはすなわち、テキストからの引用やそれへの分析が肝要だということである。栗野修司氏がウィットを交えつつ鋭く説明するように、「トマト、レタス、パテ」というハンバーガーの美味さを決定づける具体的な箇所が、「テキストから引用した箇所」なのである（栗野 10）。これを裏返すと、引用をしないし具



体的な情報を示さないという paragraph があれば、それは具材（＝中身）に欠けた外殻に過ぎず、いわばパテが無くて上下のバンズだけ、ということである。

このように“Hamburger Paragraph”では引用自体の重要を訴えられることと同時に、さらに大切なことも学生に理解してもらいやすい。それはすなわち、引用をいかに説得力ある形で自分なりに分析・解釈するのかという手法面が、「マスタード、ケチャップ、調味料」に相当するということである。この比喻により、引用をただおこなうのみではなくて、論者は自分なりに「文章力を発揮」して味付け（＝分析や解釈）をしていかないといけないことを伝えやすい（栗野 10）。翻っていえば、引用をするだけして分析と解釈という味付けをしない paragraph は、無責任なのである。つまり、引用というものはただ提示しただけで、読者に理解してもらえというものではない。たとえ論の素材として素晴らしいパッセージを引用しても、それらを調理して活かさなければ、論文という料理は完成しえないのである。

このように paragraph の構造に留意することと両輪となるのが、各 paragraph の長さである。一つの paragraph を上記のように構成すれば、必然的にまとまり（unity）と一貫性（coherence）を維持しつつ、作品からパッセージを引用・分析・解釈する必要が出てくる。この結果として、paragraph の長さもおのずと決まってくると考えられるのである。前述の引用・分析・解釈の必要があることから、paragraph は基本的には 2～3 行で終わることはまずない。なおかつ、単一のトピックのみを扱うという事情から、字数（語数）が多くなりすぎることも問題で、たとえば 1 ページを超えるような段落は避けた方が良くと考えられる。実際に、paragraph の分量は英文だと「65-200語（7～20行）」が目安とされることが多い。なお、三浦氏が合衆国で指導した際に学生の paper を調査した際には、学生たちの paragraph の長さは英文で「18語のセンテンスを 4～5 個」含むものだったという（三浦 99-100）。これは文章のページ設定にもよるが、言わば 10-15 行あたりが、英文でも和文でも paragraph の長さの一つの目安となるだろう。

このような paragraph の説明を学生にする際に強調したいのは、具体的な

例を資料で示すことの重要性である。そのためにも、学生が提出した paper から、授業で参考にしやすい箇所を集めておくことをお勧めしたい。たとえば、私の学生はとあるレポートで、Ernest Hemingway, “The Short Happy Life of Francis Macomber” における主人公夫婦を考察していた。その学生が書いた文章と、私の改良例を並置して示すところなる。

× 主人公の妻は “well-kept woman of the beauty and social position” (36) と言われており、美しさと社会的地位を持ち合わせており、自信に満ち溢れている女性である。そのような彼女だが、夫の発言で何度も浮気をしたことがあり、それをやめる約束をしたと読み取れる。一見、彼女に非がありそうに見える。しかし彼女は夫に強気に反論し、夫は臆病にもそれに引き下がってしまっている。このような二人のやりとりから、妻の方が夫よりも夫婦関係において立場が上であるように思える。【⇒段落の最後まで読まないと、結論が見えてこない。日本語的発想】

○ まずは主人公とその妻の夫婦関係における権力差について考えたい。主人公の妻は “well-kept woman of the beauty and social position” (36) と言われており、美しさと社会的地位を持ち合わせており、自信に満ち溢れている女性である。そのような彼女だが、夫の発言で何度も浮気をしたことがあり、それをやめる約束をしたと読み取れる。一見、彼女に非がありそうに見える。しかし彼女は夫に強気に反論し、夫は臆病にもそれに引き下がってしまっている。このような二人のやりとりから、妻の方が夫よりも夫婦関係において立場が上であるように思える。【⇒「○」の例だと、最初に論の指標が示されていて、読み手に論の道筋を示せる】

このように topic sentence を書くことには、広い意味での文章力が必要であることも、学生に訴える必要がある。私が上記の文例を解説する際には、「権力差」という語を取って使ったことに学生の注意を促す。ここが例えば「夫婦関係について考えたい」だけでは、夫婦のどのような関係に関してどの

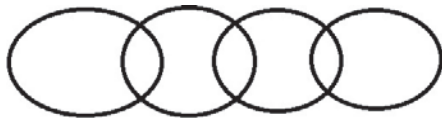
ように注目するのが、不明瞭である（夫婦間のすれ違い？ 夫婦の信頼の強さ？ 夫婦間での何かの物事への考え方？ 等）。そこで paragraph の冒頭には、トピックを明示できるだけの語彙が必要になる。この語彙力を身に着けるのには、日ごろからの読書と essay writing の練習が欠かせない。

このように、日英語での「段落」と“paragraph”の違いや、それに伴う論理構成の違いを説明したのちには、学生には具体的な練習に入ってもらおう。ここで、第二の点である、章立てが関係してくる。もちろん、実際のレポートのように数千字を書いてもらうことはスクーリングの時間割では不可能である。その代わりに、縮小版として小論文を課すこととしている。たとえ小論文であっても、章立て（アウトライン）をメモしてなおかつ論文間のつながりを考察することは、unity（内容の一致）と coherence（論理の一貫性）を論の全体で維持する際に必須である。簡単に言えば、小論文では第一 paragraph で提示したテーマに関連した内容を、どの段落でも扱わなければならない。そのような一貫性は、思いつきで執筆してしまえば、まず得られないものなのである。このことは、レポートや論文では、もくじが極めて重要であるということを、幾分なりとも実感してもらうことにつながっていくのである。

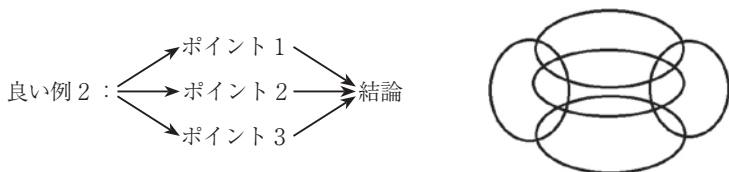
ただ、いきなりもくじやアウトラインと言われても、学生はとまどうであろう。そこで、私の授業では、essay writing の定番となっている“Five Paragraph Essay”を学生に課す。この essay はもちろん、序論と結論で1段落ずつ、body で合計三段落を、段落間の関係に留意しつつ、執筆してもらうというものである。このような essay 全体の構造が、いわば paragraph の相似形で拡大コピー版のようになっていることに、学生の注意を喚起する必要がある。また、ここで改めて学生に強調するべきは、段落間にも論理的つながりが不可欠であることである。そのためのカギこそが前述したように、concluding sentence と、その直後の paragraph の topic sentence とを、内容的に関係づけることにある。とにかく、academic writing に不慣れな一年生は、箇条書きのように思い付きで書いてしまうこともありうる。これを避けるのには、もっとも平易な書き方であろう、序論で thesis statement を言わせて、それと関連した理由を body において各段落で一つずつ示させる

(Firstly…; Secondly…; Finally…) という例を示しても良いと思う。私の場合、非常に拙い図で恐縮だが、以下のように可視化・単純化して示すことが多い。

良い例 1： 序論 (扱う題材) → ポイント 1 → ポイント 2 → …… → 結論  
➡ 論理が一本ストンと通っているパターン。ポイント 1 で書いたことを受けてポイント 2 を書いていく。サイクルが続いていくイメージ (下図)。



良い例 2： 共通した話題で各ポイントを繋いで、結論で締める。



➡ この「例 2」では、論が序論の後で一見無意味に枝分かれしている。しかし実は、ポイント 1～3 で話題が共通した話題を扱っていて (たとえば序論で「各登場人物の恋愛観について扱います」、その後「登場人物 A の恋愛観」、「登場人物 B の恋愛観」といったように)、最後に結論で結実する。各ポイント間や、それらと序論・結論との間で、内容面で重なり (サイクルの重なり) がある。

そこでどのような教材を用いるのが重要な要素となるが、私の場合は TOEFL の公式問題集にある、自由英作課題を踏まえることが多かった。その問題を、“Five Paragraph Essay” の伝統に則って執筆してもらう。この essay の執筆においては、学生の英語を書く力によっては、英語ではなくて日本語で回答することを許可しても良いと私は考えている。この自由英作文でも、回答例を教員が作成しておいたり、あるいは先輩学生の回答例で優れたものを

コピーして配ったりすれば、模範例を学生は理解してくれて、効果的である。とにかく、優れたサンプルを収集して例示できるようにしておくことが、academic writing の指導では重要なかもしれない。

また、そのように模範回答例を示す際には、前述したような引用、分析、解釈の重要性も念押しする必要がある。その際には、次のような表が便利である。

※石黒（3-6）を参考に作成。

	小論文（TOEFL の自由英作文など） a short essay	レポート a paper	論文（卒論含む） a thesis
論証（＝証拠を挙げる）	×	○	○
オリジナリティ（＝過去に 言われていない内容を述べる）	×	△	○

この表が示すように、小論文とその他二つ（paper, thesis）との大きな違いは、論証の有無である。小論文を回答するときには、それぞれ論旨に合った「多少のウソ」（石黒 4）は許容される。だが、paper や thesis においては、着実に証拠を上げて分析し、論証していくことが不可欠なのである。これはひいては、盗用がレポートや論文ではなぜ許されないのか、という問題にもつながる。盗用を避けるためには引用が必要であり、引用するためには厳密に資料を読む必要がある。これこそが、スクーリングの後半で精読の例を示す理由である。つまり、paper の各段落で引用（＝証拠）を明示できるくらいテキストを精読することを、学生に訴えなければならない。一つの段落ごとに一つは、引用やテキストへの何かしらの言及が要るということである。なおかつ、それらの証拠を学術的に体系立てて分析することも、必ず強調しなければならない。そのような精読と分析が無ければ、paper にはならないのである。さらにいえば、論文ではオリジナリティを目指す必要がある。ゆえに卒業論文では、先行研究を調べて論点を整理するという、重要かつ骨の折れるプロセスが要求されることも、念押しするべきである。

以上のように paper と論文では作品からや先行研究からの引用が求められることから、上表の説明時には、文献の探し方や調べ方にも触れる必要がある。そこで学生には、小論文の課題で自分が書いた各段落の論証にはどのような文献が必要なのか、それら文献をどのように入手するのかを（図書館 OPAC、書店、論文データベースなど）、少し考えてもらう時間を必ず設けている。これによって、レポートというものは、資料集めなどの準備の時点からして労力が必要であり、むしろ準備こそが重要なのだということが明確になる。さらには、その資料への接し方も厳密かつ慎重になされなければならない。このようにして、学生がレポート執筆時に必要な手間に気付けるようにすることは重要である。

以上のように、paragraph に関することや、それを踏まえたもくじならびに章立ての作成を、まずは授業で扱う。それらに加えて第三の要素として、授業時間の許す範囲で、引用の仕方や文献リストのルールなどの書式面や、文体面についても授業では説明している。恐らく文学研究者が essay writing 教える際に、書式を説明するときにも最も頭を悩まされるのが、文献リストの書き方や引用の仕方ではないだろうか。これはスクーリングでは時間の制約上、詳細までは到底教えることができない。書式に関しては授業では、英語文学での書式マニュアルである *MLA Handbook* の紹介はおこなう。しかし、同書を読みこんでなおかつ MLA スタイルに慣れるのには、相当の時間がかかる。そのため、基本的には、プロが書いたものを真似するというのを、学生には強く勧めている。たとえば英語文学の分野の文献リストでは、研究文献の巻末や、主要なペーパーバックの読書案内（Penguin Classics や Oxford World's Classics、Norton Critical Edition など）を参考にすることを推奨している。あるいは、授業で扱った文献一覧を教員が資料の最後にまとめておき、その文献リストを学生に見てもらうのも一つの手だろう。ただし、文学研究とその他の分野（英語学や英語教育、あるいは他言語の分野や、社会科学ならびに自然科学の各分野）とでは、文献リストを含めた規則に違いがある。そのような分野ごとの差異があるがゆえに、他分野に触れるときにはその分野のマニュアルを読むか、あるいは専門家に尋ねるかをすべきということも、学生に伝えた方が良くと

思う。

また、paper にはふさわしい文体があることも、スクーリングでは示すようにしていた。paper にはフォーマルな言葉遣いが必要だということは、学生たちも知っている。だが、案外と彼らが見逃しているものは文体であり、より正確に言えば「主述関係」と「一文一義」である。日本語は文脈に合わせて、主語が自明である箇所は主語を省略できるという、経済的な面を持つ。だがこれは、ややもすればその文や文脈における主体が不明瞭となってしまうがちということでもある（この点は、英語では基本的に各文で主語を書く必要があることとは対照的である）。そして、主語と述語の関係が崩れた文は読みにくく、複文となるとなおさらとつきにくくなる。そのため、一文の区切れを意識して、一つの文につき一つのメッセージのみを込めるということ、つまり「一文一義」を推奨している。学生には恐縮だが、これらもサンプルとなりうる例を集めておくとうれしいと思う。例えば、私が Somerset Maugham の “The Ant and the Grasshopper”（「アリとキリギリス」）を扱った授業で、以下のような文を書いた学生がいた（その学生の名誉のために申し添えると、他の箇所は文体がそれなりに整っていた。その分、以下の引用箇所がなおさら印象に残ってしまったのである）。

蟻とキリギリスなのだから兄弟の生き方に注目が①いきがちだが、このレポートでは語り手である “I” が②話が進んでいくにあたっての兄弟に対して③思う気持ちから、蟻とキリギリスのどちら側の人間④であるのかを⑤考えていきたいと思う。

この一文では、述語にあたる語が①～⑤の五ヶ所もある。特に「③思う」と「④である」の主語は、一読しただけではわかりにくいかもしれない。これを改良すれば、たとえば以下になる。

「蟻とキリギリス」という題名から、読者は兄弟の生き方に注目しがちである。しかし本レポートは、語り手である “I” が兄弟に対して抱く気持ち



に着目する。これによって、語り手が蟻とギリギリのどちら側の人間であるのかを、私はこのレポートで考察していきたい。

このように、主語を適宜入れて、文章を「一文一義」に沿って区切るだけで、読みやすさはかなり変わってくる。ただ、文章の切れ目や構造が不明瞭になることは、誰にでも起こりうることはなかろうか。そのため学生には、文章を推敲することの重要性や、その際には文体にも気を配ることを、注意する必要があるのである。

これら文体自体に加えて、その他の書式のルールにも学生に注意喚起をするべきである。たとえば、英文の場合は、フォントは多くの場合では Times New Roman が指定されている。授業によっては、一行辺りの文字数や、一ページあたりの行数、上下左右の余白、あるいは両面印刷が許されているのか否かなどが指定されていることもあろう。そして、案外と学生が知らないのは、半角の引用符（“” ならびに “） の出し方や使い方である。引用符の使用方法は、まさに引用内容やその信頼性に直結するので、特に指導した方が良い。学生には、諸規則があってそれを共有するからこそ、書き手と読み手でインタラクションができるということ、ゆえにルールは重要であることを、伝える必要がある。

### 3. インプットと文献解釈に関して：精読、コンテキスト、批評

以上のように、授業の「着地点」である essay writing について説明と練習をしたあとには、いよいよ作品の読解となる。だがここで問題となるのは、授業時間と読解例の分量との兼ね合いであり、これゆえに作品へ示せる切り口の種類も左右されることである。基本的にアウトプット (academic writing) の説明を終えた時点で、9 コマのうち 3 コマは費やされている。最終コマは実際に paper を執筆するにあたっての相談会に設定して、学生間で意見交換や、教員からのフィードバックをおこなうようにしている。結果、作品や批評を扱える時間は、実質的に 5 コマしか残されていない。このため、通学課程の以

上に、授業内容の精選をせざるをえない。

そこで何を精選するのが問題になるが、文学研究の基本だと考えられる次の三点はやはりおさえるべきだと私は考える。第一に、作品テキスト自体を綿密に読み、文体の肌理のような細部と作品全体の構造という大局とを踏まえつつ、精読の一例をしめすこと。第二に、作品の解釈においては、歴史的・社会的コンテクストへの理解が必要であること。この第二点目のポイントに関しては、文学史をおさえることも含まれる。そして第三点目は、先行研究を扱う際のバランス感覚である。ただ前述のように、スクーリングには時間上の制約がある。そのため、通学課程での授業のように、作品のペーパーバックを授業中に丁寧に取り組むことは難しい。そのため、私はこれら三点を踏まえつつ、必要な箇所を引用した資料を作成して授業に臨んだ。その際にはもちろん、これら三点が互いに関連し合っていて、ゆえに切り離せない要素であることも、忘れないように心掛けた。ゆえに例えば、先行研究で言及されている作品箇所を、作品解説時の資料に含めておくことなど、それなりに準備をしていくことが必要である。

なお、教科書としては、2007年度版の Penguin Classics 版 (Edited by Owen Knowles and Robert Hampson) と、2010年出版の光文社古典新訳文庫版『闇の奥』（訳：黒原敏行）を指定した。佛教大学の場合は、授業開始より前に、これらの指定教科書が各学生の自宅に届けられることになっている。

テキストの理解を授業で深めるためにも、受講生には事前準備として、翻訳を併用しても良いので作品を読み、気になった箇所をメモしておくことを求めている。場合によっては予習用資料を作成し、例えば「この登場人物の死の理由は何か？」などと設問を指定しておいて、それをもとに教員と学生とで問題意識を共有することも良いと思う。ただ、あまりに予習資料でこのような項目を指定すれば、学生の柔軟な読みを削ぐ可能性もあるので、バランスが難しい。また、予習では英語版を読んできてもらうことが理想ではある。だが、この論考の冒頭で記したように、スクーリングでは受講生たちの英語力が様々である。ましてや、スクーリングでは教科書の入荷状況などによっては、配布されるのが時として授業の1～2週間前となる可能性もある。スクーリングの

学生の多くは社会人として勤務していることもあり、短期間で原書を読むことは、なおさら難しい。このような履修状況と、何より新入生にまずは何らかの形で文学に触れてほしいという願いから、翻訳の使用を決意した。

さて、第一のポイントである作品の精読だが、文学の初学者でもとっつきやすくてなおかつ文学研究の基盤であるものとして、私の授業では反復表現に特に注目していく。反復をたどることが作品のテーマや構造を探る鍵であることは、J. Hillis Miller の *Fiction and Repetition* や、David Lodge の *The Art of Fiction* でも強調されていることである。Miller は現に Conrad の *Lord Jim* を上述の本で扱っているが、Conrad 作品は全般的に反復表現が多用されていて、文彩をなしている。

実際に *Heart of Darkness* でも、同一ないし類似した単語が多数出てきていて、作品世界を織り上げている。そのうち一つとして“work”という語がある。これは、語り手の Marlow が船長職を得るためにベルギーの会社に行き、そこで壁面に貼られた地図を見た際にも登場する。その場面では、地図上で赤く塗られたところ、つまり英国領に関して“some real work”がなされていると評されていて、他国とは差別化されている (11)。これと関連して、Marlow の叔母が、彼のことを“one of the Workers”と、Thomas Carlyle の労働倫理を意識した表現で高く評価する場面もある (14)。その一方で、Marlow がコンゴに到着した後では、“I don't like work—no man does—but I like what is in the work—the chance to find yourself.”というように、仕事自体は嫌いだが、それによって自己を発見できることは好きなのだということを漏らす (35)。Marlow のこの発言は、コンゴが植民地主義によって荒れ果てているという様子や、白人による収奪を見た後に発せられる。これらの発言のために、work やそれがもたらす倫理、ひいてはそれを重視する西洋的な価値観というものに、アンビバレントな視点が示されているのである。

このような反復とそれゆえのアンビバレンスは、他のキーワードからも見いだせる。そのうちの一つが“voice”である。この作品でカギとなる人物 Kurtz はであり、彼との出会いが Marlow に衝撃をもたらす。だが、Kurtz 本人は後半になるまで登場せず、その代わりに彼の“voice”を聞きたいと Marlow は

たびたび感じている (59)。これは裏返すと、Kurtz は当初は実体のない「象徴的な人物」として描かれているということであり (吉田 108)、それゆえに Marlow は興味・関心を一方的に募らせていくのである。Marlow は作品の冒頭で 観念 (“the idea”)こそが “The conquest of the earth” を支えるのだと発言しているが (7)、彼自身が Kurtz への自分の観念に対して、自縄自縛のごとくを抱いているのである。

上記のように、キーワードの反復で作品の彩が見いだしてくるが、こちらは幸いにして多くの学生たちも気づいていた。その一方で、作品内の場面の反復には、予習時には注意が向けられることが案外と少なかった。たとえば *Heart of Darkness* の冒頭では、Marlow と彼の話の聞き手である匿名の語り手や、彼らの友人たちが登場する。Marlow たちは、夕暮れ時のテムズ川に停泊中の帆船ネリー号 (*The Nellie*) に乗船している。その後、Marlow の長い語りの後で、匿名の語り手は夜の闇に包まれた船や川の様子を語る。後述するが、Edward Said が指摘するように、この作品は円環構造を持っているのである。

問題はこのような反復箇所を、限られた時間内でどのように示すのかということである。授業方法や作品テキストへの着眼点が巧みな先生ならば、手際よく板書で授業されることも可能だと思う。ただ、私のように作品テキストのなるべく全編で精読したい者には、板書のみで学生に理解してもらうというのはやはり困難である。そのため、授業で必要な箇所を、すべて資料に打ち込んでいた。ただ、学生間での英語力の差を踏まえて、日本語で小見出しを付けるようにしておき、なおかつ日本語 (黒原氏の訳本) での該当ページも書くようにしておいた。たとえば、work に関するシーンにおいては、以下のような引用を作成した。

p. 11 Marlow が会社へ行くと、two women が編み物の最中。その面接の待合所にも地図。

Deal table in the middle, plain chairs all round the walls, on one end [of the walls] a large shining map, marked with all the colours of a rainbow. There was a vast amount of red [British]—good to see at

any time, because one knows that some real work is done in there, a deuce of a lot of blue [French], a little green [Italian], smears of orange [Portuguese], and, on the East Coast, a purple patch [German], to show where the jolly pioneers of progress drink the jolly lager-beer. However, I wasn't going into any of these. I was going into the yellow [Belgian]. Dead in the centre. And the river [the Congo River] was there—fascinating—deadly—like a snake. (11) 黒原 26-27  
……この地図の色は各国の支配図と関係しています。Penguin 版の注釈をご参照ください。

ここで推奨申し上げたいのは、このように引用箇所の資料をつくるときには、下線を用いるなどで「どこを話題としているのか」を学生にわかりやすくすることである。学生間で英語力が多様であることはもとより、スクーリング（集中講義の一種）では、学生は集中力を切らしてしまいやすい。教員側も、手際よく説明を続けるのには、大変な労力が必要である。小見出しを付けたのは、そのような事情もある。加えて、資料においては、ページ内で行番号を挿入しておき、授業中に「～行目を見てください」というように言及することもおすすめしたい。とにかく、その時々に対処するトピックが資料のどこにあるのかが明示されるだけで、学生も教員も集中力の維持具合が相当異なってくるものだ、私は実感した。

くわえて、資料の渡し方もポイントとなると考えられる。私の場合は当日に資料を印刷して配布するという形をとった。それゆえに学生にすれば授業で突如として資料を初読することになる。このような事情も、前述のような小見出しや行数を伏した理由である。ただ、資料が初読でもわかるように念入りに作成することは、やはり教員には負担である。そこで、大学の ICT 環境によっては、データベースにアップロードしたうえで、あらかじめ読んでおいてもらうということも可能かもしれない。しかし精読のための抜粋資料はえてして大部となる。その資料をもし学生が各自で印刷するとなると、それなりに費用がかかる可能性がある。もしタブレットやスマートフォンを持っている学生がい

れば画面上で少し見ることも可能だろう。しかし、それらの機器では紙媒体よりも読みにくいことが多いし、そもそも端末を持っていない学生には教育機会の面で不公平となりうる。資料の渡し方やタイミングによって授業の幅は広がると思うが、これは各大学の状況に順応していく他ないのかもしれない。

以上のようにして作品の精読の一例を学生に示したのちには、第二のステップとして、作品の社会的・歴史的なコンテキストを扱うようにしていた。学生たちは高校までの国語の授業の影響か、文学作品を読むときには、まずそこに作者の想いや自伝的な要素を読みこもうとする。そこに対応して、まずは Conrad の伝記を参照しつつ（Jocelyn Baines や Zdzisław Najder の著書）、彼自身のアフリカ体験から扱う。具体的には、Conrad が実際にコンゴに滞在していたことは見逃してはならない。加えて、Conrad 自身が船乗りであり船員間の連帯を重んじていたことや、それゆえに work や労働倫理を重視していたことにも触れていく（Conrad は Marlow とは異なり、コンゴでは船長にはなれなかったが）。ここにおいて、Marlow の人物描写や倫理観を考えるためのヒントを、受講生は得ていく。そのような Conrad 自身の背景と同時に、作品の舞台である19世紀アフリカでは、欧米列強が植民地を築いていたという背景があることも、必ず言及する必要がある。前述の Marlow が会社においてイギリス領の work について考える場面でも、アフリカが各国に分割されている様子が、地図上の色分けという形で生々しく示されている。

だが、もちろん作者の重要性は自明にしても、批評理論が隆盛する現在では、作者は作品の意味付けを決める絶対的要因ではなくなっている。そこで、たとえ初学者向けの授業であっても、より広い文脈に作品を置くことの重要性を伝えることは、今や避けがたいこととなっている。そこで、Najder や藤永茂氏の著書を引用しつつ、当時のベルギー領コンゴの様子にも言及する。これらの他にも有用な資料としては、George Washington Williams や Roger Casement による報告書があるが、これらは Norton Critical Edition（第4版ならびに第5版）に収録されている。このように、自伝の面でも社会的な面でも、キャンソンの作品では Norton 版のように簡便な本が世に出ているからこそ、学生も教員も手軽に資料に接しやすいのである。

また、コンテクストの一環として、文学史をおさえることも必須である。この点でも、Conrad や *Heart of Darkness* は、教材として扱いやすいものとなっている。これには、Conrad 自身の評価が歴史的に変遷してきたということと、彼が写実主義とモダニズムとはさまにいる作家だということとが関係している。これらの理由から *Heart of Darkness* を教材とすることで、英文学というディシプリン自体の変遷を考える一助にもなるのである。

Conrad 自身への評価の変遷は、生前と死後で分かれていると言っても良い。彼の作品への評価は生前では割れていて、必ずしも称賛されていたとは言い難い。たとえば E. M. Foster は Conrad の表現は「煙幕」(“the smoke screen”)がかかっているようであり、親密さを恐れている(“dread of intimacy”)かのようであるという。その結果、Conrad の文体の中心には「中心に曖昧模糊としたものがある」(“a central obscurity”)のではないかと Foster は評価している (Foster 131-32)。Conrad のとつぎにくさという点は、出自と結び付けられていたのかもしれない。Virginia Woolf は Conrad の才能を認めつつも、自身の小説論で “Mr Conrad is a Pole” として、外国人ゆえに例外的な存在だと強調している (44)。このように、Conrad は生前には、大いに評価が混乱していた。

ところが Conrad の死後において、状況は変わる。彼の評価の潮目が変わっていくのは、F. R. Leavis が英国小説の伝統を重視するという保守的な文学観を示したことがきっかけである。Leavis は英国小説の伝統を築き上げた “The great English novelists” のうち一人として、Jane Austen、George Eliot、Henry James と並んで Conrad を挙げたのである。これ以降、Conrad は文学史の教科書の一角を占めるようになった。このような変遷をたどることで、英文学という学問領域は自然発生的に生まれたものではないということが、学生に示せる<sup>(1)</sup>。それどころか、英文学という分野は時代や社会の流れとともに移ろいやすい人工物であるということを、学生に理解してもらいやすくなる。

また *Heart of Darkness* が写実主義とモダニズムのはさまにあるという点でも、この作品は小説技法の歴史を考えるのに大きな手助けとなる。この作品では、匿名の語り手が Marlow による一人語りをフレームしている。これは非



常に単純に言えば、Marlow が見聞きしてなおかつ語ったものしか、読者は知りえないということである。つまり、この作品は、Marlow の視点に限定されて語られているのである。確かに Marlow は執拗なまでにアフリカでの体験を微細にかつりアリストティックに語ろうとする。だが、たとえば Marlow が Kurtz の命を受けた人々から矢で襲撃されるときには、すぐには矢が飛んできたとは描いていない。彼は当初 “little sticks” が飛んでくるように見えたが、やがてその正体が “Arrows” だと遅れて気づくのである (55)。このような遅延を Ian Watt は「遅延された解説」(“delayed decoding”)と呼んだが (175)、要は Marlow の当時の生の体験や見方を、彼の意識の流れに沿わされるという形で、読者は追体験させられるということである。

このような筆致からは、写実主義時代の全知の語り手による作品とは、明白に異なるものが読み取れる。確かに Marlow はリアリズム志向の言葉遣いで物語をしている。しかしその語り口は実際には、厳密な視点の使用というモダニズム的な技法と響き合っているのである。Allan H. Simmons はこの小説に関して、“a key text in the development of literary Modernism, signaling the break with nineteenth-century realism and ushering in Modernist experimentation.”と指摘している (16)。つまり *Heart of Darkness* は、19世紀リアリズムからモダニズムがいかに発展したのかを示すテキストなのである。このため Marlow の語りは、小説技法の歴史の変遷をなぞっているかのようである。このような点からも、Conrad は20世紀の英国小説を考えるのについてつけの作家のうち一人なのである。

このように文学史を含めたコンテキストをおさえて、なおかつそれにより Conrad の技法の特性に触れた後で、ようやく第三の点、先行研究を扱うことが始まる。文学の授業で最も重要なのは、作品テキストを綿密かつ正確に読もうとすることだと私は考える。しかしながら、学生たちが自分とは異なる視座や批評があることを知り、多様な意見の存在に気づくようにすることも、文学教育の役割のうち一つだと思う。何より、様々な解釈があってそれらと自らの論を照らし合わせることなくしては、卒業論文は書けない。

しかるにここで留意すべき点は、批評の選び方である。これは先ほどの作品

テキストの切り口を学生に示した際と通じるが、あくまで教員が示せる批評は「一部の例」に過ぎないのである。だが、教室では教員と学生との間に立場の違い、よりははっきりといえ「権力差」がある。そのため、学生は教員の提示した例を、絶対的なものとして受け入れかねない。そのため、なるべく多様な切り口を学生に提示することが必要である。しかしながら、多様な批評を紹介することのみに尽力してしまえば、淡々と批評をなぞっていくだけになり、授業は迫力を持ちえない。そのような冷淡な授業では、学生たちを授業に巻きこんで、なおかつ自分の批評上の関心を探ることには導けないであろう。批評理論の教育に関して玉井暉氏は「多様な批評理論のいくらか総花的な紹介」と「コミットメント」との間でどうバランスをとるのかという問題があると、鋭く指摘している（玉井 9）。玉井氏のこの指摘は批評理論の授業に限らず、個別の作品テキストを読解して解釈を考察するというオーソドックスな授業においても、もちろん通じることだと私は考えている。

だが教員にも学生にとっても幸いなことに、古典作品であれば、不可欠な批評というものが少なくともいくらかは存在する。本稿が特に訴えたいのは、それらの批評の中でも、対立したり補完し合ったりしている批評を授業で取り上げることの重要性である。それにより、作品には多様な読みの存在があることが示せる。この多様な読みは、いわば作品の意味はすべて作者に還元できるとしがちであるという高校以前の授業の束縛から、学生たちを解放していく。その結果、自分たちらしい読みを自信と責任をもって示すことの大切さに、学生は気づいていってくれると考えられるのだ。

それではそのような多様性を示す批評が *Heart of Darkness* では何があるかといえ、ポストコロニアル批評の分野において最も顕著である。この大きな理由としては、本稿の第一節で言及したように、ポストコロニアル批評の礎を築いた Edward Said が、*Orientalism*（1978年）や *Culture and Imperialism*（1993年）で Conrad について言及していることがある。そもそも、Said 自身が元は Conrad 研究者としてキャリアをスタートさせた。だが *Heart of Darkness* における植民地主義や人種差別に関しては、Said よりも前から批評が存在した。それというのも、Chinua Achebe が1975年に MIT で講演を行い、

それを元に“An Image of Africa”（1977年）という論考を著しているのである。AchebeはConradを“undoubtedly one of the great stylists of modern fiction and a good storyteller into the bargain”と評して、その文体やストーリーテリングの才能を認めている（394）。だがそれと同時にAchebeは、Conradがアフリカの人々を差別的に描いているとして、“a thoroughgoing racist [改訂前の1977年では“a bloody racist”]”として批判した（399）。Achebeはさらには、このようなアフリカへの白人からの差別は西洋ではあまりにも普通の考えであって、ゆえに気づかれずにきたのだとさえ述べる（399）。このAchebeの批評は、Conradを「偉大な伝統」に連ねてきた英文学というディシプリン自体に一石を投じることとなった。さらには、Achebeのこの論考は、教科書としても用いられることが多いNorton Critical Editionの*Heart of Darkness*におさめられることで、今なお強い影響力を有している。

この「一石」の結果、作品が人種差別的であるのか否か、帝国主義に否定的であるのか否か、という点に関して、たびたび論じられることとなった。中には、Cedric WattsのようにConradを擁護する意見も出される<sup>(2)</sup>。その一方で、Saidは確かに、Conradにはアフリカの独立が予期できなかったという限界を認めていた。だが、*Heart of Darkness*は黄昏のロンドンで始まり、闇夜のロンドンで終わるという自意識的に円環的な語り（“self-consciously circular narrative forms”）を持っている。ゆえに、この作品は植民地主義との距離感を示しているという（Said, *Culture* 28-30）。ロンドンという大英帝国の中心もまた、Marlowが見聞きしたアフリカと同じく、闇に包まれているのである。このように、*Heart of Darkness*は多様な解釈を促すのみではなくて、それを論じる人は植民地主義表象への自身の主体位置を棚上げにせずに読むことを求められる。あるいは、植民地主義に関する表象への目配りからは距離をとって、より作品テキストの語りに特化した研究も可能だろう。このように*Heart of Darkness*は、論者に自分の批評的立ち位置をいやおうなしに自覚させる。ゆえにこの小説は、批評時に論者に求められるコミットメントとは何かを教えてくれる作品でもあるのだ。

そして、このように本文読解、コンテキストの理解、先行研究への接し方を

扱ったのちには、paper 作成のための相談会を必ず授業の最後におこなう。paper の題としては、*Heart of Darkness* を読み、気になった箇所を paragraph writing に留意して1600字以上で回答せよ、というものになっている。より正確には、以下のようなものである。この設題では、paragraph の構造に留意して、なおかつ作品から適切に引用するという基本を守っている paper は、高く評価している。

Joseph Conrad の“*Heart of Darkness*”を読み、作品中で個人的に気になった点について、自分なりに考察してください（例：語り手の Marlow が作品中で果たす役割、枠物語という構造、作品中の女性表象、作品中の植民地主義表象、船乗り用語、言語表現の面、その他の作品の社会的背景、など）。その際には、授業で扱った批評を参考にさせていただいて構いません。

このように「例」という形でトピックをいくつか示した方が、paper を始めて書く人がつまづく可能性は大いに軽減される。相談会の際に際に学生に求めるのは、事前に予習で作成してきてもらった疑問点や意見を、授業で得られた知見と比較しつつ、3～5 人一組で相談してもらおうということである。スクーリングを経て信頼関係が出来た後なので、毎回案外とスムーズに相談会は進む。学生たちが相談する際には、教員が机間巡視をして、“Five Paragraph Essay”で収まるかどうかをチェックする。中には paper の範囲を超えたような難解だったり広大だったりするトピックを扱おうとする学生もいる。たとえば、このスクーリングの paper では、西洋植民地主義一般について語るようなことは、できない。そのような学生がいる場合は、作品テキストに立脚した着実な paper となるように、教員から助言をすることが必要である。

#### 4. 終わりに

以上のように、まことに拙くなおかつ赤裸々な形で、通信教育課程での授業

実践と、そこで得られた感触について考察してみた。本稿を同業の先生方がお読みになれば、文学研究上で自明のことが多く書かれている、と戸惑われてしまうとは、私は恐れつつも承知もしている。だが、そのように自明であることを整理して言語化することは、やはり重要である。そのことを、通信教育課程という学生たちが多様な背景とニーズをもつ場を通じて、それらのニーズにかみ砕いて答えようとする試みを通じて、なおさら学べたと思う。ましてや、「基礎ゼミナール」のように初学者がそろそろ授業では、そのような「かみ砕き」、つまり言語化・可視化していくことが、なおさら肝要だと私は確信している。

しかし、かみ砕いて授業ををすると言っても、これは通信教育課程ではなおさら困難であり、なおかつ緊張するものだった。学生の中には、私よりも年上で、保護者世代にあたりなおかつ社会人経験が豊富な人々も少なくない。あるいは私よりも若くとも、様々な道をたどって大学にやってきたという人も多い。それらの多様な人々に私が授業をしないといけないというプレッシャーと、彼らが己の人生経験に基づいて作品を鋭く解釈されることから、いつも授業では身が引き締まる思いがした。

だがそのような緊張感や学生からのフィードバックがあったからこそ、そもそも授業とは何か、ということを考えられたと思う。そして、そのようなニーズや状況に応えるためには、教員側が絶えず研究の引き出しを増やして、奥行きも増していかなければならない、そのことを痛感した。貴重な機会をいただけて、大学の皆さまや受講生の皆さんに、あらためて感謝申し上げたい。本当にありがとうございました。願わくは、私のこの稚拙な実践が、他山の石となれば幸いである。

## Notes

- (1) ここで、Leavis の作家のセレクトの仕方を念頭に置くことは興味深い。彼が挙げている Austen と Eliot は女性作家であり、James はもとはアメリカ合衆国出身、Conrad は帝政ロシアに支配されていた当時のポーランド出身である。つまりしばしば指摘されるように、ミドルブラウ以上の階層に属するような「生粋の」英国人男性は、ここでは選ばれていない。
- (2) Watts は、同僚である黒人教員一人が Conrad を評価したことを触れて、

Conrad を弁護しようとする。Watts はいわば、このように特定の個人をサンプルとして選びだして、その集団の代表としてみなそうしている。Watts のこの姿勢は、「八〇年代多文化主義のイデオロギー」の例であるということを、中井亜佐子氏がするどく指摘している（47-48）。

## Works Cited

*Heart of Darkness* からの引用は、2007年の Penguin Classics 版に基づく。なお、“Hamburger Paragraph” の図は、<http://birnadeit.x.fc2.com/reviews/page-3316839.html> より引用した（2020年1月30日閲覧）。

- Achebe, Chinua. “An Image of Africa.” Carabine, pp. 393-404. Originally published in *Massachusetts Review*, vol. 18, no. 4, Winter 1977, pp. 782-94.
- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. Weidenfield, 1960.
- Carabine, Keith, editor. *Joseph Conrad: Critical Assessments*. Vol. 2. Helm Information, 1992.
- Conrad, Joseph. *Heart of Darkness*, edited by Paul B. Armstrong, Norton Critical Edition, 5th ed., W. W. Norton, 2017.
- . *Heart of Darkness and the Congo Diary*, edited by Owen Knowles and Robert Hampson, Penguin Classics, Penguin, 2007.
- Guerard, Albert J. *Conrad the Novelist*. 1958. Atheneum, 1967.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad*. Chatto and Windus, 1948.
- Lodge, David. *The Art of Fiction*. 1992. Vintage Books, 2011.
- Miller, J. Hillis. *Fiction and Repetition: Seven English Novels*. Harvard UP, 1982.
- Najder, Zdzisław. *Joseph Conrad: A Life*. Translated by Halina Najder, Camden-Boydell, 2007.
- Said, Edward. *Culture and Imperialism*. 1993. Vintage-Random, 1994.
- . *Orientalism*. 1978. Penguin Books, 2003.
- Simmons, Allan H. “Reading *Heart of Darkness*.” *The New Cambridge Companion to Joseph Conrad*, edited by J. H. Stape, Cambridge UP, 2014, pp. 15-28.
- Stape, J. H. *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*. Cambridge UP, 1996.
- Watt, Ian. *Conrad in the Nineteenth Century*. U of California P, 1979.
- Watts, Cedric. “‘A Bloody Racist’: About Achebe’s View of Conrad.”

- Carabine, pp. 405-18. Originally published in *Yearbook of English Studies*, vol. 13, 1983, pp. 196-209.
- Woolf, Virginia. "Character in Fiction." *Selected Essays*, edited by David Bradshaw, Oxford World's Classics, Oxford UP, 2008, pp. 37-54.
- Yamamoto, Kaoru. *Rethinking Joseph Conrad's Concepts of Community: Strange Fraternity*. Bloomsbury, 2017.
- 栗野修司。「リポートの書き方学習会1-2：「卒業論文」の書き方—何を書くか、どのように書くか—」。『佛大通信』、第617号、2017年、pp. 10-15。
- 石黒圭。『この1冊できちんと書ける！ 論文・レポートの基本』。日本実業出版社、2012年。
- コンラッド、ジョゼフ。『闇の奥』。訳：黒原敏行、光文社文庫、光文社、2009年。
- ステイプ、J. H.、編集。『コンラッド文学案内』。訳：日本コンラッド協会、監訳：杜本雅信、研究社、2012年。原書は *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*, edited by J. H. Stape, Cambridge UP, 1996.
- 玉井璋。「批評理論を読む、テキストを読む」。『批評理論を読む、テキストを読む—文学研究方法論への挑戦』。大阪大学大学院文学研究科英米文学研究室、2007年、pp. 7-11。初出は『英語青年』、研究社、2002年11月号、pp. 6-7。
- 中井亜佐子。『他者の自伝—ポストコロニアル文学を読む』。研究社、2007年。
- 藤永茂。『「闇の奥」の奥—コンラッド／植民地主義／アフリカの重荷』。三交社、2006年。
- 三浦順治。『ネイティヴ並みの「英語の書き方」がわかる本』。創拓社、2006年。
- 山本薫。『裏切り者の発見から解放へ—コンラッド前期作品における道徳的問題—』。大学教育出版、2010年。
- 。『「自己」の向こうへ—コンラッド中・短編小説を読む—』。大学教育出版、2012年。
- 吉田徹夫。『ジョウゼフ・コンラッドの世界—翼の折れた鳥』。第2版、開文社出版、2004年。初版は1980年出版。